

MIURA アコンカグア 2019 遠征日記 (豪太)

2019年1月2日 ~ 22日

1月2日(水)

行動: 日本 (移動日)

14:00 羽田搭乗 日本出発 (同日) 18:40 パリ到着 トランジット 機中泊



父のクラーク高校の生徒たちも見送りにきてくれた

1月3日(木) 現地時間 (日本時間 マイナス12時間)

9:45 ブエノス・アイレス到着 11:50 ブエノス・アイレス出発 13:45 メンドーサ空港到着

14:00 メンドーサ空港ゲートにてカリコブラ、ジェニ、金子さんに会う

14:50 Diplomatic Hotel 到着 18:00 夕食 20:00 ホテル戻る

メンドーサ(アルゼンチン)までのフライトはとにかく長かった

日本を午後1時半過ぎに出発して日にちをまたいで日本時間の夜中一時半に到着したので36時間かけてここまで来たことになる。メンドーサの時差は日本とちょうど12時間違うから時間を計算しやすい。これほど長くフライトに乗っていただけあってこっちはまるで季節が違う。1月は南半球では初夏で、ほんの数日前まで北海道でスキーをしていたとは思えないような暑さだ。

ここまで無事来れたということは、概ね順調だといえるが、パリのラウンジでは旅行客の荷物置

き忘れによる爆弾騒動があったり、ブエノス・アイレスの空港では接続時間が短いためターミナル間を駆け足で進んだり、忙しかった。

メンドーサではメインガイドのカリコブラさんとジェニさん、そして羽田空港で見送ってくれたはずの金子さんがアメリカ経由ですでに僕たちより先に到着して出迎えてくれた。カリコブラさんはスイス人、今回の遠征の現地手配をしてくれている。ジェニさんはカリコブラさんの元で働いているガイド、パタゴニア出身で20年以上もアコンカグア登山の仕事をしているという。

とにかかにも疲れたので一旦ホテルにチェックインして一休み。その後夕食に出かけた。夕食の場所は LA Lucia、お父さんのリクエストでお肉が食べられるところ

さすが肉料理には定評があるメンドーサ、赤みの肉ながら熟成具合と焼き具合が絶妙で塩味だけで十分たのしめた。



メンドーサは初夏！ 到着早々、ステーキとアルゼンチンワインを楽しむ。

1月4日(金)

6:00 起床 荷造り 7:30 朝食 10:00 ナショナルパークにて入山手続き

12:30 昼食 15:00 昼食終わる ウスパジャータに向けて出発

16:50 ウスパジャータ到着 21:00 夕食

朝から荷造りだ。今回はメンドーサから北西にあるウスパジャータに二泊して、その後高度順化を行うラスクエバで三泊する。ラスクエバから移動して、アコンカグアのベースキャンプとなるプラサ・アルヘンティーナまで人と酸素と最低限の荷物はヘリコプターで、それ以外はミュール(ラバ)にのせて運ぶ。ヘリコプターに搭載できる重量に制限があるため、装備をなるべくコンパクトにして、スキーケースはメンドーサにおいていき、スキー、ストックや通信アンテナなどをテントマットに包み軽くする。そんな作業を朝から行った。

朝食後、国立公園に向かいアコンカグアの登山申請を行った。登山許可、撮影許可、ポーランド氷河を超えるための特別許可をとるため書類にサインをする。これで晴れて公式に登山活動ができる。

本日の予定地であるウスパジャータはメンドーサから車で2時間。途中昼食を摂る。

ウスパジャータはメンドーサの北西にあるが地図をみると道路は一旦南西に向かい、V字カーブを描き北西に行く形になっている。不思議に思ったが車に乗って初めてその理由がわかった。

車がこのようにメンドーサからV字に向かうのはアンデス山脈の間を抜けていくからだ。

グランドキャニオンのような侵食によってできた景色とその奥に広がる高峰に雪がついた山々が広がり、それにヨーロッパアルプスが混ざったような見所満載の景色だ。

ウスパジャータはその中でも山脈に挟まれた盆地であった。水と緑が豊かな場所で、まるで砂漠の中のオアシスだ。実際このあたりはリゾート地らしく今回泊まるウスパジャータグランドホテルにはグランドやプールがあり、子供連れの家族も多く滞在していた。標高は2000近く、ここでの滞在日数を当初予定していた1日から2日間に変更した。それは父の旅の疲れをとるためだ。日本を1月2日に出発し今日が1月4日。暦の上では二日間であるが時差で半日得しているので実質3日間移動してきたことになる。1日だけの滞在で急激に標高をあげるよりもここで二泊する方がいいだろうというチームドクターの大城先生のアドバイスにより、出発2週間前に急遽ウスパジャータの滞在に日数を増やした。いい判断であった。

ホテルに荷物を運び入れ、今日の予定を話し合った。ガイドのジェンによると、夕食は九時以降でないと食べられないという。アルゼンチンはスペイン式的生活様式で昼食後にシエスタ(昼寝)の時間があり、その後仕事をするため、夕食は夜中になる人が多い。時差ボケだったためみんなはシエスタに問題はなかったが少しでも時差に慣れようと僕はここを周遊を走った。久しぶりに体を動かすと気持ちよかったがすぐに息切れする。ここは通過地点とはいえすでに標高2000m 空気も薄くなっているのだ。



公園のなかにある事務所で登山申請、その後、一路 ウスパジャータへ

1 月 5 日(土)

7:00 起床 8:00 朝食 荷造り 10:00 ウスパジャータ周辺散歩 13:10 昼食
16:00 Cmbre の取材 17:00 ミュール用の荷物出し 18:00 夕食 20:00 就寝

今日はウスパジャータ2日目。長旅でなかなか体を動かす機会がなかったので今日は近くを散歩することにした。現在いるウスパジャータグランドホテルから町まで二十分ほど歩き、さらに町のメインストリートを抜けると山や丘が広がっていた。町の途中にチベットバーという看板があった。聞くところによるとウスパジャータはハインリッヒ・ハラーとダライ・ラマの交流を描いた「セブンイヤーズインチベット」の映画の撮影場所になったという。言われてみれば荒涼した山や丘が広がるこの景色は確かにチベット高原にどことなく似ている。正面の丘をゆっくりと上がると、遠目ではチベット高原に似ているこの丘も近くで見るとサポテンがあったり丘に上がるルート上に十字架があった

り — これがネパールやチベットだとマニ石だ、日本だとお地蔵さんだろう。信仰が違ってもそれぞれシンボルが違うが、山にこうした宗教的シンボル置くのは万国共通しているのかもしれない。途中アルパカに似たワナカにも遭遇した。首が長くてアルパカよりも毛が短く一見すると鹿のようだ。南米にきた実感がわく。お父さんの調子はまあまあだ。心配していた不整脈もあまり出ていない。2時間半ほどゆっくり歩き、先ほど通り過ぎたチベットバーで昼食を食べる。

メニューはたくさんあったが結局お父さんはビーフステーキを食べる。

午後は Cumbres という地方のフリーアウトドア紙の取材をお父さんが受ける。スペイン人の記者で英語はあまりうまくないので記者がガイドのジェニにスペイン語で話かけ、それを英語で僕に訳し、それを僕が日本語で訳すという作業になった。なんだか伝言ゲームのようで、途中で違った意味になっていないか心配だ。

今日の夕食はさすがに九時に食べるのは嫌だったので街に繰り出しステーキ屋さんに行く。

僕は昼に食べたステーキとハンバーグがまだお腹にのこっていたのでサラダだけ頼んだが他のみんなはビフテキやラムステーキを頼んだ。しかし量が多かったので結局みんなの残りが回ってくるここに来てからステーキ率が非常に高い。でも赤みが多いステーキでとても美味しい。



のんびり身体慣らし。景色はチベット高原に似ているが、十字架が置いてあった

1月6日(日)

天気 晴れ、強風、吹雪、雷

行動 ウスパジャータ(1900m)→ラスクエバス到着(3200m)

6:30 起床 荷造り、8:30 朝食、10:30 ウスパジャータ出発 12:10 ラスクエバス到着
13:00 昼食、14:00 休憩、18:30 夕食 21:00 就寝

今日は標高1950mのウスパジャータから標高3150mのラスクエバスに移動した。

ウスパジャータからここまででは比較的大きな谷を通り抜けて徐々に標高を3150mまで上る。距離は80キロとあったが山道でバスがそれほどスピードを出せないため2時間半かかった。この道、7号線はそのままアンデス山脈を突き抜けチリ国境を超える。そのため山奥の道にしてはトラックや一般乗用車の往来が多い。

途中、僕たちが今回の遠征でキャンプを張る予定のバッカス谷の入り口やアコンカグアのビューポイントを通過した。残念ながら天気が崩れてきてアコンカグアの全容は見えなかったが雰囲気はわかった。

ラスクエバスはもともと大きな駅舎があった。しかし、1990年代に鉄道が廃止されたと同時に駅舎や線路も衰退、駅舎も線路も朽ちている。しかしその名残で今でもこの周辺にはいくつかのレストランや宿泊施設がある。今回滞在する場所もその一つでコテージ丸ごと僕たちの隊で借り切っている。これまでのホテルと違いベッドはシングルだったり二段ベッドだったり部屋はこじんまりしているがその分リビングに暖炉や机がありリラックスできるスペースがある。

ここはすでに標高3150m、父にとってこの標高は鬼門だ。ちょうどヒマラヤのナムチェバザールと同じぐらい、ヒマラヤでもこの標高で体調を崩すことが多い。体調を見ながら順化しなければいけない。

昼食後、軽く歩こうと話をしていたが天気が急変し、雷、あられ、雪、暴風が吹き荒れた。そのため午後はゆっくりとコテージで過ごす。気温もウスパジャータよりかなり低くここに来ていきなりインナーダウンジャケットを着用することになった。今日から数日は天気は不安定らしく、午前中は比較的晴れているが午後は崩れやすいとジェニが言っていた。

明日は倉岡さん、平出君、中島君と合流、それから車で標高4200mのところに行き順化をする予定。これから3日間はここで過ごすことになる。





ラスクエバス到着！



1月8日(火)

天気 晴れ 強風

6:30 起床 9:00 朝食 11:00 高度順化 クリスト レデントールの峠 13:30 昼食

18:30 夕食 20:45 スッキリ生中継 21:30 就寝

今朝の朝食は9時と比較的遅めであったが、昨日のミーティングで変更したプランをまとめるのに時間がかかる。今回、プラザ・アルヘンティーナベースからアメギノ峠までヘリコプターを使うことに対し、あらゆる要素を考えた。このプランの提案は地元ガイド、カーリーコブラとジャーニーからで、もし実現したらきっと新たなアコンカグア登山方法となる。

しかし、このプランを実行するにしても、いきなりその高度(5300 ㍎)にいけるだけの、十分な高度順化と体力がなければいけない。引き続き順化行動はしっかりと続ける。

今日の高度順化は昨日と同じく、クリストデントールの峠 3850m まで車で行き、その後、ゆっくりとラスクエバスまで道路を下山する。

クリストデントールの峠は物凄い強風だった。砂埃もひどい。

クリストデントールの峠からはアコンカグアの先っぽが少し見える。その先っぽには白い雲が渦を巻いていた。これが有名なモンテビアンコだ。スペイン語で白い嵐を意味するこの気象条件は多くの登山家たちを拒絶してきた。

山の中腹でカーリーコブラのトラックが迎えにきた。父、大城先生、貫田さんは車内、僕と倉岡さんはトラックの荷台に乗った。立ちながらグネグネ道を降りる時の体重移動はスキー見たいで楽しい。日本ではこんな事出来ないだろう。

お昼は珍しく、豆スープ。これまで肉ばかりだったのでかえって新鮮である。デザートはフラン、日本でいう手作りプリンで絶品だ。明日はベースキャンプへの移動予定なのでこのプリンとはしばらくお別れだ、残念。夜はスッキリの生中継があった。

1 月 9 日 (水)

天気 午前 晴れ、強風 午後 吹雪

5:00 起床 6:00 ヘリコプター スタンバイ 9:00 朝食 10:00 ラスクエバス 町内観光

14:00 昼食 16:30 スッキリ電話収録 18:00 本日のフライト中止決定

20:00 夕食 22:00 就寝

今日は朝から BC(アコンカグア・ベースキャンプ)行きのヘリコプターフライトのスタンバイだった。しかし、朝から風が強くヘリコプターが飛ばない。待機状態が一日続いた。

この状況は昨日から天気予報でわかっていた。強風になるとヘリコプターに乗せる重量を通常よりも減らさなければいけなくなるので、全員と荷物を乗せるにはフライト数を増やさなければいけない。一応 4 フライトを予定、人と荷物を振り分けた

フライトに乗る順番は高度順化が必要な順番に決める。父は登攀に補助酸素を使うので、高度順化活動は他よりしなくて大丈夫。同じくベースキャンプより上部に登らない貫田さん、金子さんもすぐに行かなければいけないというわけではない。

必然的に登頂を目指して事前の高度順化が必要な平出さん、中島くん、大城先生、僕と倉岡さんが先になる予定だった。そのため万が一、先発フライトが飛び後発フライトが飛ばなかった場合でも対応できるように荷物や通信体制を整える。

午前中の待機が決まり、朝食をいつものレストランで食べる。スタンバイは夕方までだったので、時間ができたからラスクエバスの街を散策した。ここは昔アルゼンチンとチリを結ぶ鉄道の駅があった。しかし 1993 年にこの路線が廃線となり駅舎も廃墟と化していた。

それでも時間は十分余った、本読んだり昼寝したりとゆったりとした時間を過ごしたが結局、フライト中止が決まったのが夕方の 18:00 だった。

こうした遠征ではありがちな展開、明日は飛びそうだが柔軟に対応したい。



ヘリコプター待機中



ラスクエバスの町を散策

1月10日

天気 午前晴れ、夕方雪

5:30 起床 6:15 ラスクエバス出発 6:50 オルコネスよりヘリコプター出発
7:00 プラサ・アルヘンティーナ到着 7:20 雄一郎 プラサ・アルヘンティーナ到着
8:30 プラサ・アルヘンティーナにて朝食 11:00 テント設営 13:30 昼食 15:00 ミーティング
18:00 検診 19:30 夕食 20:00 食事計画、詰め 22:00 就寝

今朝は朝から無風快晴、ベースキャンプに行く期待大。

朝起きてからすぐにヘリコプターパッドがあるオルコネスに向かう。オルコネスはヘリコプターパッドでありながらアコンカグアのルートへの入り口でもある。ちょっと丘を上がればアコンカグアが望める。

到着するとヘリコプターのローターはブンブン回り、先発の平出君とケンロウ君を乗せ飛び立つ。ヘリコプターはすぐに戻ってきて今度は貫田さん、大城先生、僕を乗せベースに飛ぶ。オルコネスの谷を抜け正面にアコンカグアを視界に捉えながら一気に飛翔。途中、コンフルエンシアのキャンプが眼下にあった、ここは徒歩や馬のキャラバンでベースへ向かうときの、オルコネスの谷からプラサ・ミューラスに行くため中継キャンプだ。そこから一気に機体は上昇、5000mの峠を越えると隣のバックス谷に入り、僕たちのベースとなる「プラサ・アルヘンティーナ」に到着した。あっという間だ。

ヘリコプターは僕たちを下ろすとすぐに父達を迎えに行く。20分後、お父さん、金子さん、倉岡さんを乗せたヘリも無事に到着した。

キャンプはまだ日が当たらない谷の影にあり冷え込んでいた。15個程の大きなダイニングテントと登山者用のテントが張ってある。ここがプラサ・アルヘンティーナのベースだ。モレーン(ガレバ)が終わったところに位置して、目の前にアコンカグアの東陵が見える。そこからわず

かにポーランド氷河とピエドロ・バンデーラの岩が望める。右にはアメギノ(峠)が見える。これまでグーグルアースや地図で調べた光景だが、実際に観ると感慨深い。ここからアコンカグアの頂きを目指すのだ。

ついてすぐに僕達が使うダイニングテントに案内してくれた。

大きなドーム型のテントで8人テーブルが真ん中にあり、サービング用のフルーツやシリアルを乗せたテーブルも隅に置かれている。僕たちのミュール(馬)に乗せて運んだ別送便も到着していた。テントは鉄のフレームで外張りがあり、中張もある。ストーブも完備、入り口には顔を洗えるシンクもあった。床はウッドのフローリングがしてある。かなり快適なダイニングテントだ

みんながダイニングを囲むとすぐに朝食が出てきた。こんな極地でフルーツは食べ放題、コーヒーや紅茶、シリアルがあり、ブルーチーズを乗せたスクランブルエッグは絶品だった。これまで経験してきたベースキャンプより格段に過ごしやすい。しかし、ここはすでに標高4200m、食べすぎ、動きすぎは注意だ。倉岡さんから今日はあまり動かないようにと指示が出る。

朝食後、荷物整理とテント設営を行う。ちょっとした動きも息が切れる。

荷物整理をしていると隣の隊からお父さんと一緒に写真撮りたいと次々と人がきた。どうやらお父さんの噂はすでに広まっていたらしい。その中に面白い人がいた、父に見せたい写真があるとってスマホに写っていたのがデナリ(マッキンレー)の僕の写真。昨年僕がデナリに登ったときにすれ違った登山家だった。思わぬ再会をした。

そうこうしているうちに昼食の時間。朝食はなんとステーキ！絶妙な味加減だ。

昼食後、一番気になっていた今後の動きをガイドと話しあう。ここからはジャーニーを含め現地4人のガイドが合流した。登山計画は昨日のヘリコプター待機により一日遅れている。今後の高度順化とアタックに向けて大枠を話し合う。結果、登頂日は1月20日から1月21日になる。高度順化プランは変わらず3グループに分かれるが倉岡、平出、ケンロウ班は明日出発、大城先生と僕はガイドと共に明後日c1に向けて上がる。父はベース付近を中心に高度順化する = という大枠が決まりそれぞれ午後を過ごす。

夕方、アコンカグア駐在のドクターに父の健康チェックが入る。問診と血圧、呼吸器を調べる。このチェックを通らないとアコンカグアに登れない

心配していた血圧だが、ここ数日安定して低くなっていた、見事合格である。さて、明日から倉岡チームは順化にあがる、夕食の後はアタックの食事計画を立て準備をして寝る。



ベースキャンプ到着！



全員元気です！



快適なダイニングテント と 豪華な食事



1月11日(金)

天気 晴れ

6:00 起床 8:00 朝食 10:30 倉岡待機出発 11:00 検診 11:45 散歩 13:00 昼食
15:00 高度順化ミーティング 18:00 定時更新 19:00 夕食 21:00 就寝

今日は朝から倉岡隊は一足さきに高度順化に出発した。明日は大城先生と僕、父はベースキャンプに残りこのあたりを中心に高度順化を行う。それぞれバラバラのスケジュールとなるので、その前にミウラ・アコンカグア隊のメインフラッグと記念撮影した。

11:00から検診があった。この検診はアコンカグアに登る人は全て受診が義務付けられている。ここプラサ・アルヘンティーナのベースでは年間約千人、ノーマル・ルート側のプラサムーラのベースでは4千人が検査を受けて登る。結果が悪いと登山許可がおりない。父さんは昨日、血圧が高くもう一度再確認をされたが、今日は血圧が下がり見事パス！

反対に僕の血圧が高くて、もう一度再検査するように言われた。高度順化の後頑張ろう、少し焦る。その後、近くを高度順化のため散歩してから昼食。午後は明日から順化のためのミーティング、フラッグアップ、スキーの調整をした。



現地ガイド4名も参加して TEAM MIURA 集合写真 @ アコンカグアBC



ベースキャンプ周辺を散歩 プラザ・アルヘンティーナ 標高 4200 ㍍



ベースキャンプに点在するテントと発電用 ソーラーパネル

1 月 12 日（現地情報）

今日は 豪太&大城ドクターが高度順応の為 C1 (4900m)へ。倉岡、中島、平出が C2(5850 m)まで登っています。三浦雄一郎はBCに残り軽い運動、少し下ってポーランド氷河が良く見える場所まで行ってきました。三浦の挑戦が知られており海外の登山者たちが訪ねてきて記念写真を頼まれるそうです。(写真はスペイン隊)。ベースキャンプではソーラーパネルを使って発電、それでパラボラアンテナで WiFi が使えます。ただ、速度はかなり遅く、写真 1 枚送るのも数十分かかり、また他のメンバーたちが使用して混みあうとなかなか繋がりにくくなったり突然切れます。キッチン専用のスタッフがいて本格的な美味しい食事を準備、倉庫には各国の食材が置いてあります。

三浦雄一郎の体調は順調、今日も BC 在住のドクターが往診にきて問題ありませんでした。午後から天気が崩れて、豪太たち C1 では吹雪きとのことでした。

C1(豪太より) = 現地 12 日 20:00(衛星電話)

「無事、C1(4900m)入りいたしました。

一気に 5000 ㍍まで上がったので疲れていますが、心配していた血圧も BC にいたときと変わらずこの標高でも 160/80 です。順応できていると感じています。天候は午前中晴れていましたが風が少し強く、アメギノ峠から吹いています。登攀中は大体 5 ㍍くらいの風。現地オペレーター Aconcagua Vision が設置している C1 には僕たちの他に 8 名ほどの登山者がシェアしています。外は猛吹雪です。



キッチンスタッフと各国の食材が揃っている食材テント

1月13日(日) 高度順化2日目 C1 → BC

6:00 起床 7:00 朝食 8:15 c1 出発 9:50 アメギノ峠

11:00 5600m リーチ 下山開始 12:15 c1 着 13:47 c1 から下山開始

15:30 ベース着 19:00 夕食 20:00 ミーティング

昨日、ベースキャンプから C1 に登り、高度順化 2 日目、今日はアメギノ峠を越えてキャンプ 2 まで行く予定だ。しかし、途中、倉岡、平出、中島チームとアメギノ峠で会った時、倉岡さんから気になる話を聞く。それは登攀予定しているポーランド氷河とそこでのスキー滑走だが、ポーランド氷河の状態があまりにも悪く、緊急ミーティングが必要だと言う。

本来なら、C2 タッチをして、今日も C1 に泊まる予定だったが、チーム全体の今後の方針を見直す必要があるので、一旦 5600 m 地点まで登ってから、今日中にベースキャンプまで下ることにした。今後の事もあるので、5600m 地点まで下ることにした。

天気も下り坂、明日は高所で猛吹雪の予報をウェザーニュースさんから聞いていて、実際 C1 を撤収するとき、風が急激に強まり昨日までダイニングテントとして使っていたテントが風に潰された。

15:30、ベースキャンプに戻る。流石に標高差 1400m を一気に降りると空気が濃く感じる。同時に急いで行動したので疲れも同じくある。すぐにお父さんと上の状態を相談して、夕食まで小休止。

みんなが集まった夕食後、倉岡さんが一昨日からルート偵察をしていたポーランド氷河の状態を報告した。ポーランド氷河はブルーアイスの箇所と、この数日の間に降り積もった雪がペニテンテスと呼ばれる氷の突起の間に溜まり、膝まで埋まる状態でありながら、その下にある氷の部分はとても硬いという。そのため積雪のなかに埋まり足がとられると同時に、足元と周りの硬い氷に挟まり、バランスをちょっと崩すだけで大怪我となる。このような箇所が連続して続くうえ、ブルーアイスはアイゼンが噛まない程硬い。正直、父がこのルートを登るにはリスクが高すぎる・・・という状況なので、ルートをノーマルルートに戻す方が良いと話しをした。

プラサ・アルヘンティナー側からノーマルルートへ向かうにはアメギノ峠を東へ、平らな斜面をトラバースしてプラサムーラ側のルートに合流するよう、プラサコレラのキャンプを目指す。

ロジスティック的にも技術的にもポーランド氷河より楽になるが、問題はぐるりと山を回りこむことになるので、その間のトラバースが長く、現在の父の移動スピードではキャンプ数を本来のポーランド氷河案よりも多く増やす必要がある。登山できる日数も酸素の量も関係していてもう少し計画を煮詰めなければいけない。

夜も遅いのでルート計画は明日に持ち越す。

1 月 14 日(月)

7:30 起床 8:00 朝食 10:30 ミーティング 11:30 登山向け食事プラン 13:00 昼食
14:00 登山向け食事プラン 17:00 酸素計算 19:00 夕食

朝食後、ミーティングを行う。

現地のメインガイドであるジャーニーとハビエールも加わり、今度のルートとスケジュールを検討した。ポーランド氷河の危険性を認識した上で、スキー滑走重点より、優先順位として安全にアコンカグア登頂を目指す意向を父に確認。スキー滑走は山頂付近からではなく状況を見て滑走可能な場所で行うことを前提とした。

そこで検討されたのが、当初予定していたヘリコプターでアメギノ峠ではなく、ノーマルルートにより近いところまで行くことだ。これにより長いトラバースで必要とされる日数も父の体力も2日分温存できる。もしこれが可能となれば登頂成功率が格段に上がりそうだ。

ただ、ヘリコプターが着陸できるか分からないため、ヘリコプターで5750mまで行くのをプランA、アメギノから時間をかけて進むのをプランBとして準備をすることにした。さらに下山は僕たちがキャンプを張っているプラサ・アルヘンティーナ側の反対にあるプラサムーラ側の方が距離も短く速やかに下山できると提案があり、その方向に行くことにする。

その場合、今回このベース(プラサ・アルヘンティーナ)を一度出発すると、こちらにはもう戻ってこない。残りの荷物は留守を任せる貫田さんにオルコネスへ運んでもらうことになる。

午後はこのプランに沿って食事計画を中島ケンロウ君と、そして父が登山時に使用する酸素(ボンベ)計算を大城先生と行った。

食事計画は日本から持ち込んだ食材と現地で調達したものを組み合わせる。嬉しかったのは現地の食材、美味しい本場の生ハムやブルーチーズなどをふんだんに盛り込んでいることだ。重量より、登山中のキャンプ地で食事を楽しむことに重点をおいてある。

また、キャンプ地に到着後、〈レセプション〉というハムやチーズ、パンとお茶を食べる時間が設定されていて、日本で言う3時のおやつ時間だが、これもかなり内容が充実していた。日本やヨーロッパでは食事はなるべく軽量にとと思うのだがこちら南米では山での食事を楽しむ文化があるようだ = これは三浦隊の風土と一致している。

異文化合同の食事計画には午後いっぱいかった。

1 月 15 日(水)

7:30 起床 8:00 朝食 10:00 BC でフラッグ & スポンサー向け写真撮影 13:00 昼食
14:00 ミーティング 15:00 荷揚げ用荷物作り 16:00 計量 16:30 洗濯
17:00 スッキリ電話取材 17:30 酸素ミーティング 19:00 夕食 20:00 定時交信
21:00 酸素確認

午前ベースキャンプにて写真撮影を行った。その間、近くのヘリパッドからヘリコプターが飛びたつ。聞くところによると、そのヘリコプターは僕たちの遠征で使う、アメリギノ峠の先の着陸場所を偵察にいったそうだ。その後、パイロットのディウロ、整備士、ガイド、現在ドクター、レンジャーを交えたミーティングが行われた。オペレーション MIURA だ。結論から言うと、ヘリコプターはアメリギノ峠よりも先の 5580m 地点に着陸可能、昨日の打ち合わせにあったその地点から 5 日で山頂に到着するプラン A の可能性が出てきた。そして天気予報では 18 日出発が望ましいということとなる。徒歩で向かう僕たちはその 1 日前、17 日に出発しアメリギノ峠に入り、翌日、その先で父と合流することになる。ということで、明後日の出発だ！
午後は荷物の重量計算を午後行う

1月16日（現地情報） Jan 16th

先ほど（JST8:30am）現地ベースキャンプからの定時連絡情報です：三浦雄一郎の体調はすこぶる良く、本日も 1 時間ほど登山中に使うザックに荷物を入れ背負って付近を歩いたのですが、全く問題なく歩くスピードもしっかりとしています。心配していた不整脈はなく血圧も上手くコントロールができてたそうです。豪太たちサポートチームは明日（現地 17 日）、出発なので今夜は素晴らしいお肉でバーベキュー。豪太曰くこんな美味しいお肉ははじめて！というくらいでワイルドな食事でした。

1月17日（現地情報）（10:00am） サポート隊 BC → アメリギノ(5360m)

サポート隊(豪太、倉岡、大城、平出、中島)が三浦雄一郎より一足先にベースキャンプ出発

いたしました。(先発隊 アメギノ峠到着)

1月18日 (現地情報) 三浦雄一郎 BC →5580m → プラザ・コレラ(6000m)

先ほど豪太から連絡がありました。

本日 15:20に無事全員にプラザ・コレラ(6000m)に到着。

三浦雄一郎の調子はとても良くて補助酸素を使用しながらしっかりと登ってこれました。

プラザ・コレラはノーマル・ルート側になり、アタックへ向けての大きなキャンプ地でテン

トおよそ60張り、100名近いクライマーが入ってとても賑やかとのこと。天候は安定します。

夕食は「手巻き寿司」パーティーで、日本から持参した海苔、缶詰、地元の鮭などをいただ

き、大盛り上がりで楽しそうな雰囲気伝わってきました。後ほど、FBの方に三浦雄一郎の

コメント(音声)をアップいたします。明日(19日)は インディペンシア(6380m)を目指

し、現時点の予定で21日山頂アタックです。これからは34年前(1985年)に登った同じ

ルートを辿って山頂を目指します。以上、定時報告です

18日、日本時間(20:58) 三浦雄一郎は無事にヘリコプターで予定しておりました

5580m地点に着陸。アコンカグア山頂へ向けての登山活動を開始いたしました。昨日、徒歩

にて登山を開始していたサポートメンバー(豪太、倉岡、大城、平出、中島、現地ガイド)

と合流し、当初予定していた 5750 ㍍キャンプよりも上のプラサ・コレラ(6000 ㍍)へ向かいます。気象予報をサポートしていただいていますウエザーニュースからの情報によると 20 日頃から強風 (27 ㍍前後) の予報となっており、引き続き天候をみながら登山を続けてまいります。天候次第では登頂日を 21, 22, 23 のいずれかにするか今後検討してまいります。明日以降、キャンプ地、登頂日のスケジュールが変更していく可能性がありますこと、ご注意ください。豪太情報ですが、メンバー全員元気です！

1月19日(現地 18:10) 情報 & 新スケジュール

昨日最初のキャンプとなるプラサ・コレラ (6000 ㍍) に到着した三浦雄一郎ですが、気象予報に基づき、登頂プランを変更いたしました。現在 20 日～22 日の 3 日間にかけて高所(7300 ㍍地点)で 20～25 メートルの強風が予測 (気象サポート・ウエザーニュース提供) されている為、登頂日を予定していた 21 日から 23 日へ先送りいたしました。2 日間、プラサ・コレラに滞在し、21 日から登攀活動を再開いたします。

1月20日(現地 11:30am) 情報

三浦雄一郎 アコンカグア登山中止のお知らせ

数時間前にプラサ・コレラより連絡が入り、

大城先生のドクターストップにより、三浦雄一郎のアコンカグア登山が中止となりました。

ほんの数時間前(昨夜 JST20:00 頃)の電話で本人は「絶好調」と申ししており、登る気いっばいでありました。元気であることには変わりはありませんので、中止となり一番残念なのは本人であると思います。 ※豪太は三浦雄一郎と途中(ニド・デコンドレス)まで下山後、明日早朝、他のメンバーとともに登りなおし、登頂とスキー滑降をめざします。

++ 下記、三浦雄一郎の登山中止のご報告となります ++

本日、日本時間(21日未明/現地20日昼)、アコンカグア山頂へ向けて登山中の三浦隊から連絡がはいり、チーム・ドクターであります大城和恵先生の判断で三浦雄一郎の登山活動が中止となりました。1月18日にアコンカグア・ポーランド氷河側のベースキャンプを出発し、ヘリコプターで5580[㍉]地点にはいり、その日のうちにノーマル・ルート側のプラサ・コレラ(6000[㍉])のキャンプまで登攀いたしました。その後、山頂アタックへ向けて天候待ちの為、2日間、プラサ・コレラにて停滞をしていたのですが、この高度(6000[㍉])での長時間にわたる生活が86歳にとって肉体的、生理的に負担がかかっているとの判断で、これ以上、高い標高での登山活動は心不全をおこす危険があると判断され、ドクターストップとなりました。三浦雄一郎本人はとても前向きで自覚として大丈夫、登れると感じていましたが、大城先生は前回(2013年)のエベレスト登山以降、主治医として三浦の心臓の状態をよく把握されており、三浦も納得してその指示に従うことといたしました。

以下、電話でのコメントです；

豪太 「19日から20日、2日間このコレラキャンプにいます。

この間、三浦雄一郎の状態を二晩みてきたのですが、この標高での生活がかなり肉体的そして生理的に厳しいとみました。先ほど、大城和恵先生からドクターストップという見解がでました」

三浦雄一郎 「自分ではまだまだ行けるつもりでいたが、大城和恵先生の判断にしたがい、今回の遠征は自分としてはここで終わる。出来れば豪太たちに山頂へ向かってもらいたい。」

「僕自身、大丈夫だと、頂上まで行けるという自信はありましたけど、やはり周りでみての状況、特に大城和恵先生の判断ということで、それに従うということにいたしました。」

大城和恵(チームドクター) 「よくここまでこの肉体と年齢でがんばったと思います。ただこの標高はもう生物学的に86歳の限界です。生きて還る為に今日降りる、この判断をいたしました。ここまでよく本当にがんばられたと思います。それだけでも素晴らしい記録だと思います」このような形で今回の遠征を終えることは残念ではありますが、また次の挑戦に向けてく生きて還るために下山いたします。本日中にプラサ・コレラからニド・デ・コンドレス(5500[㍉])まで下りヘリコプターでベースキャンプ、それからオルコネスへまいります。

1 月 20 日(日)

7:00 起床 8:00 朝食 10:00 大城先生から相談を受ける 10:15 倉岡さんと相談
10:40 お父さんに話す 12:00 ニド・デ・コンドレスに向けて下山
13:30 ニド・デ・コンドレス到着 14:10 ヘリコプター迎え 15:00 テント張り
17:30 夕食 18:00 就寝

早朝4時くらいからテントを揺さぶるほどの強い風、予報通りの強風、もう1日ここプラサ・コレラキ
キャンプ(6000 標高)に停滞する予定だ。

僕はみんなと朝食を食べ、トイレを済ませ外を歩いていると大城先生から呼び止められる。

大城先生の顔はいつになく深刻だ。先生から、

「昨日のお父さん、夜中にトイレに行った時の息遣い聞いた？」と聞かれた。

テントは父の状態を代わる代わるモニターできるように、父と僕と大城先生の 3 人で同じテントを
使用している。夜間中も父が睡眠時に使用している酸素(ボンベ)や父の状態を見るためだ。86 歳
の父にとってこの標高 6000 標高でのテント生活そのものが大変で、身体を少しでも動かすこと、狭
いテント入り口から出入りするだけでも大仕事なのである。大城先生のいった「昨日のトイレ」とい
うのは夜間、外に出ずとも用をたせる通称「ピーボドル」(尿瓶)で排尿しているときの話した。

僕もその息遣いは聞いていて、父は激しく呼吸していた。

大城先生は「あの調子ではいつ心肺停止になってもおかしくない」と話し始めた

父の心臓を誰よりも知っているのが大城先生だ。

出発 2 週間前にも、大城先生の勤める札幌大野病院にて精密検査を受けてきた。

父の心臓はこれまでの不整脈に加え加齢による複数の衰えがある。特に心肥大や弁膜症、冠動
脈の狭窄などはここ数年で状態が進行しており、酸素が少ない高所でそれらの症状を悪化させる
血圧には十分注意を払い、これまで薬でコントロールして下げていた。しかし、このような疾患が
ある中で、もし血圧が高くなると肺動脈の圧力が上がり肺水腫になりやすくなる。

さらに肺機能の低下も見られているので、平地にいたときでも苦しそうに激しい息遣いを聞くこと
は往々にしてあった。

それがここ6000m の標高の滞在で、身体を起こすだけでまるでマラソンを全力で走ったような父
の息遣いは聞いていて心配していたが、それが心停止の可能性程とは思っていなかった。

こちらに着いてから検討し決めたプランは父の体力を温存するため5580m までヘリコプターで上
がり、そこからプラサ・コレラキャンプへ登った。本来の高度順化は何度か標高の高い所の登り降
りを繰り返し酸素の少なさに身体を慣らすものだが、同時に体力も使う。若い人であれば体力を
残したまま順化を行えるが父の場合はその活動だけで体力を使い切り登山が終わってしまう可能

性があった。そこで考えたのがヘリコプターと補助酸素(酸素吸入)の使用だ。

父は標高4200m のベースキャンプでは十分順応しているが6000^mの順応はできていない。そのためここでの滞在で酸素吸入をしているが、それでも日常でちょっとした動作をするだけで呼吸が激しくなる。また自発的に酸素を止めてしまう。本人は高度順化を進めるためだと考えているのだろうが、現在の父の状態ではこれは危険きわまりない。

父が自発的に止める以外でも機械の不具合によって酸素流出が止まることもある。現在の山の中での酸素吸入システムは二つある。一つはマスク方式で鼻と口を覆い被せ酸素の流量を調整する方法、もう一つは機械式でチューブを鼻に当て吸引するとセンサーが作動、酸素がその度に鼻に噴出する方法でオンディマンドシステムという。マスクは登山行動中の使用では効率がいいが口と鼻が塞がれてしまう、普段の生活や睡眠時はオンディマンドシステムの方が鼻だけではなく口が開いているので喋ったり食べたりできるので好まれる。

昨夜、そのオンディマンドシステムが止まった。父はすぐに僕を起こしたのだが、作動しない原因がわからずすぐにマスク方式に切り替えた。

コレラキャンプに来てから2日目の朝ですでに父の状態について対応する場面が色々あった。

大城先生は「これ以上標高を上げて豪太くんと私だけでお父さんを生かしておく自信がない」と話し始めた。確かに父には歩く体力と気力がある、ゆっくりと自分のペースで登り続けることができれば、さらに1日の標高差を現在のプラン通り行うことができれば頂上へ登ることができるだろう。しかし、それにはこれからの5日以上、標高6000^m超に滞在しなければならない。1日6時間の行動(登山)であればそれ以外の18時間×5日間=90時間、常に父の状態を昼夜、二人だけで見ていくのはほとんど不可能だ。

しばらく大城先生は黙り「私はこの時点でドクターストップをします」と宣言した。

それからが大変だった。まず登攀リーダーである倉岡さんに相談する。現在の父の状況を説明した上で父の下山までのロジスティック的な内容を検討する。父の状況は上部キャンプに行けば行くほど良くなるわけではなく、またレスキューの確率も下がり、その労力は飛躍的に上がると考え、すぐにニド・デ・コンドレス側(以下ニド)に下山するのがいいだろうということになった。

ニドは僕たちが来たポーランド氷河側のベースであるプラサ・アルヘンティーナとは反対側にあるプラサ・デ・ムーラへ下りる方のキャンプ地で、ここプラサ・コレラからでも良く見える。こちら側のベースであれば風が安定していてリコプターもすぐに飛ぶことができるという。

一番大きな問題はどうやったら父の山頂への気持ちを断たせるかだ。

それは副隊長であり、息子である僕の問題だ。

しかし、この事実を率直に伝えるしかない。意を決して、大城先生、平出カメラマンと一緒にお父さんのいるテントに入った。

最初に僕から伝えた — 「先ほど大城先生と話したのだけど、この数日のお父さんの様子をみて、僕と大城先生二人ではこれ以上の高度で十分にお父さんの状態を見ることができないため、大城先生がドクターストップをしました」

すると父は驚きながらも、「大丈夫、大丈夫、全く問題ない」という。

父にとっても突然の宣告、遠征がここで終わるには寝耳に水であろう、もしかしたら何かの冗談と
思っているのかもしれない。

しかし、僕がここ数日の経緯を父に話し「この標高でお父さんがほとんど自分のことができず昨晚
のようにトイレに行くだけで息も絶え絶えになっているのを見るととても心配だ」というと
「大丈夫、とにかく今日1日ここで過ごして、明日インディペンデシアまで登ってから考えよう」といっ
た。

大城先生は「今の雄一郎先生の状態は、今この標高にいるだけで私と豪太くんでは十分看ることが
できません、ましてやここから標高が上がると低酸素の危険度がさらに増します、環境も二人では
十分対応することできなくなります、私としこここでドクターストップといたします」

とするとさらに「大丈夫、大丈夫、問題ない。とにかくもう1日ここにいてから決めよう」と、なかなか
引き下がらない。

父の強い気持ちを断つにはもっと真剣に向かい合わなければいけない。

僕は「それではドクターストップがかかった上で僕が登山を進めるわけにはいけません、大城先生
も同じです。僕は降ります。例えば僕と大城先生がもう登山を中止をしたら、お父さんはガイド達と
一緒に一人で登りに行ってください」といった

すると、長い沈黙がある、目をつぶって何かを考えているようだ。

五分、十分、二十分と何も誰も話さないまま重い空気が流れる

これだけでは全く埒が上がらない僕は思い切って

「お父さんの気持ちは絶対に諦めることはないと思う、プラス思考でおおらかでいつでもどうにか
なると思っている、その思いはいつも山の頂上を見ている、けどお父さんの肉体はそうではない
のだよ。お父さんの気持ちだけアコンカグアの頂上に行っても体が死んでしまったら残された僕た
ちはどうなるの、その体を引きずりながら下ろす僕たちの気持ちはどうなるの？」と自分の気持ち
をぶつけるうちになんだか涙が出てきた。

すると父は「うーん」と言い

「倉岡さんと呼んできてくれ」といった

倉岡さんが来ると父は、

「今、ここでの状況を整理すると二つあると思う、一つはこのまま自分が登山を続けるか、もう一つ
は私が降りて豪太と大城先生だけでもアコンカグアの頂上に登ること」と聞いた。

倉岡さんは「このまま雄一郎先生が登り続けても危険度が増す上にレスキューが困難になります、
もし現在、先生の様子がよくないのならここから降りるのが一番です」

次に大城先生は、

「雄一郎先生が降りるのなら、私は職務として一緒に付き添って山から降ります」

そして、全員が僕を見た。

「僕は、、、とりあえずニドまで下山しながら考えます」とにごした

正直、僕は父が登山を断念したとき、僕が登るという選択技は考えていなかった

なにせ、先ほどまで父の気持ちを断つために、僕は登らないと言っただけだ。
父に山頂を諦めさせておいて、自分だけ登っていいものか正直判断に迷った。
しかし、とにかく下山をするということが決まり、慌ただしく荷物を整理してテントを畳む。
そしてニド側に降り始めた。
先頭はジャニー、次に僕、そして父、 — 安全を考慮して転落防止の為にロープをつけ後ろに倉岡さんがつく。ニドへ下りるルートは序盤急斜面でワイヤーでルートが確保されている。足元に気を付けながら下山する。
降りながらも、どうしたものかと思いついていた。
なにせ、大城先生のドクターストップを告げられてから、僕の気持ちが途切れていた。僕も一緒に降りるものだと、この遠征はこれで終わりなのだと。
しかし、お父さんは「豪太はアコンカグア登れ」と、僕に言った。
ニドに着く最後の大きな迂回トラバースを進むときになって「もし登れるなら・・・」
という思いが芽生えた
そして倉岡さんに「ニドからアコンカグアに登るとしたら今晚中にコレラキャンプに戻るのいいですか？」と聞くと、
「そんなことはない、明日の早朝にニドを出発すればその日の昼過ぎには降りてこられる」と言った。なんだか胸が高鳴る。
それから慌ただしかった。
本日は強風予報が出ていたので、てっきり夕方まで十分時間があると思っていて、あわよくばニドの近くまでスキーを上から降ろして、少なくとも父と一緒にスキーが出来るのではないかと考えていた。しかし、ニドのヘリポートにつくやいなや、すぐにヘリコプターが飛んできた。
一便目はどうやらレスキュー要請が入っていたようで、一旦、オルコネスにヘリコプターが行くとすぐに父と大城先生を乗せるために戻ってきた。
ヘリを待つ僅かな時間に父と大城先生はブーツのアウトターを脱ぎポートのすぐ下で待機。そして僕は30mほど離れた安全地帯へと引き離されてしまう。
「またね！」といったが30mからの距離ではヘリコプターの音にかき消されただろう、しかし僕は思い切って「明日アコンカグア登りに行ってくるから」と大声で叫ぶと、お父さんは大きく僕の方に手を振ってくれた。
「届いたかな？」と思うまもなくあっという間にヘリは飛び去った。
さて、残されたのは倉岡さん、平出くん、ケンロウくん、僕と4名の現地ガイド達
早速テントを張り明日の準備を始める。プランは明日、夜中12時起床、午前1時半出発とした。標高差は約1500m、今日降りてきたプラサコレラ、インディペンデシア、ラ・クエバ、そして山頂と本来なら3日かかる日程を一気に一日で登ろうというのだ。それでも明日登ることができれば明日でこの遠征は終わる、本当にそんなことが可能なのかな？と半信半疑で倉岡さんのプランに乗ることにした。幸い、父の分の酸素(ボンベ)が残っている。登山中は基本的に使わないものの、夜の睡眠では酸素を吸引して、慌ただしかった予定変更で消耗した体力を回復することにした。

夕食はここまでとっておいたキムチ鍋をみんなで食べ就寝する。ここはアコンカグアの西側、夜遅くまで西日がテントに当たり9時頃まで明るく暑い。

それにましても、この急な展開に戸惑う。父が下山してその思いを僕が山頂へと届けなければいけない。引導を父に渡しながらも、その父からバトンを手渡された。

そして、まだ僕自身、父を下山させる判断が正しかったどうか分からない。

確かに父は歩くことができる、気力も十分あるし体力も残っている、もしテント生活面のサポートだけしっかりしていたら、登れたのではないか…いやそれでもドクターストップがかかったのだから遠征を進めようがない…でも、もし僕が父の味方となって判断したら登ることができたのだろうか？アコンカグア山頂への父の強い想いが手に取るように感じられるだけに、辛くなる。

普通酸素を吸ったら気持ちよくなり眠れるのだが、色々な思いがよぎって、結局一睡もできず出発時刻を迎えてしまった。



メディカルチェックを受ける



下山へ



ニド・デ・コンドレス 到着 ヘリコプターを待つ



1月21日

天気:晴れ 強風

0:00 起床 1:30 ニド・デ・コンドレス(5500 標)出発 3:20 ベルリン小屋
3:44 プラサ・コレラ(6000 標) 6:30 インディペンデンシア(6380 標)
8:50 ラ・クエバ(6660 標) **11:12 山頂(6961 標)** 14:05 ニド・デ・コンドレアス着
16:00 テント移動 18:00 夕食 18:50 就寝

昨夜はほとんど寝れなかった。

急なドクターストップによる父の下山とその判断に対する自分の責任、バトンを渡され山頂を目指す役割、ニドから一気に山頂へ行くという急激な展開、全てが急すぎて頭が混乱している状態で、暗闇のなか出発準備を始める

それでも、身体を動かして準備をしていると気持ちが落ち着いてきた。考えればとてもシンプルだ。自分のペースでもかく山頂を目指せばいいんだ。そしてお父さんのザックとサングラス、帽子をかぶってその気持ちを山頂に届けよう。

ウェアの件で悩んだ。倉岡さんから上下エクスペディションウェアで行くほうがいいと言われたが、どう考えても暑すぎるように思えた。しかしこのことで、倉岡さんに後ほど感謝することになる。先頭はガイドのジャーニー、後ろに倉岡さん、その後ろにはエミリアーノ、カッチャ、ハビエールがいて平出くんとケンロウくんは撮影のため前に行ったり後ろに回ったりしている。

登るペースは自分で決めていいらしい。

僕がジャーニーのすぐ後ろにつくとジャーニーもそのペースに合わせて前が出る、遅れると少し歩みを遅くしてくれる。寝不足だけど、昨夜酸素吸ったせいか体が軽くジャーニーとの距離を詰めていく。ペースよく昨日1時間半かけて降りてきたプラサ・コレラへ登りでも2時間ほどでつく。標高差が500mなので単純に換算すると登高スピード250mということになる。ここが標高 6000 標と考えるといいスピードだ。体も軽いジョギングしているくらいに感じる。今日はなかなかいける

正直不安が大きかった。アコンカグア登山は父に標準を合わせていたので、サポートの僕たちも十分な高度順化ができていなかった。たまたま強風の為、6000 標で2泊していたが、それ以外は最高5000標のステイを1日と、父に先立ってベースを出発して5300mのアメギノ峠に宿泊したただ、それでも前日、一旦酸素を吸引して休んだせいか順化は十分できているように感じる。

インディペンデンシア手前で強烈な風が吹き、思わずよろめく。しかし、インディペンデンシアまで登ると全く風を感じず穏やかである。時刻は6時半、うっすらと周りが明るくなってきた。つかの間の休息、ここでアイゼンを履き、ゴーグルを装着、日が差してきたので、ヘッドランプをしまう。

帰りはここからスキーでニド側に滑って降りるつもりなのでスキーと酸素をここに置いていく。

本来、僕の高度順化はここまでなのでこれ以上は酸素を使う予定だった。しかし身体の調子はすこぶるいいので無酸素でも十分いけるだろうと思った。でも一抹の不安があったので念の為、倉岡さんに酸素を1本持ってもらうことにした。

インディペンデンシアの稜線を越えると強烈な風が吹く。風に吹き飛ばされないよう前のめりになりながら歩を進める。この風はラ・クエバに続くトラバースの途中にあるピナクルというところまで吹

きつけている。以前から聞いていた強烈な風 <白い嵐> — 嫌だという思いよりもその風に出会えたことを光栄に思う。

ピナクルに着くと眼下に巨大な山脈の影が見える。影アコンカグアだ。はるか太平洋に伸びんとするそのスケールに圧巻、何もかもが壮大なる景色だ！

そこからラ・クエバまで標高差は僅か300mほど。しかしここに来て今までのペースはもう保てなくなっていた。急に足が重くなる。父から聞いていたが、ここがいやらしいガレ場の始まりである。ガラガラと崩れる岩と雪面のミックス。斜度が増して、一步登るのに苦労を重ねる。

ラ・クエバとは洞窟の意味で、確かに洞窟のようなくぼみがある。これが海拔0mであれば30分ほどで登ってこれそうな距離であったが、喘ぎながらようやくその洞窟に転がり込む。ここは窪みと山影で風から守られているので、ゆっくりと休む。羊羹とクラッカーを食べる。しかし、そのクラッカーも口の中の水分を持っていきそうのでその場で吐いてしまった。

水分補給をして出発前におしっこをしようとしたが出ない。よほど脱水なのかと思った。

ラ・クエバから山頂まで急斜面が続いている。アイゼンを横にしてカニ歩きしながら進む。さらに自分のスピードが落ちている感じがした。そのなか、平出くん、倉岡さん、ケンロウくんのスーパー・エリートチームは何事もないようにスタスタと登っている。

彼らのスピードが悔しくて一生懸命スピードを上げようとするが呼吸息した分しか足が上がらない。喘ぐように呼吸、タイミングをみて足を上げる、この繰り返しを延々と続く。

やっとアコンカグアの頂上直下、標高差にして100m地点まで登りつく。ここからはなだらかなトラバースをいき、一旦、山頂直下を回りこむようにして山頂を目指す。今までのペースだと30分くらいかな、と思ったところで急に視界が歪んだ。手足もしびれ、動いていないのに胸の動悸が激しい。一瞬意識が飛びそうになるのでストックに寄りかかる。様子がおかしい、足にも手にも力が入らずその場で一度しゃがみこむ。いったい自分の身になにが起きているのか分からず、怖くなった。

でも、以前エベレストの8千m地点で脳浮腫や肺水腫になったときのような頭痛や肺の痛みを伴うものではない。意識もはっきりしているし自分がどこにいるのかもわかっている。ただ激しい目眩と手足のしびれだ。深呼吸をすると少し収まるが、一步足を進めるとすぐに身体じゅうの力が抜けてしびれる。怖くなり、後ろにいる倉岡さんに「なんだか調子がおかしい」と伝える。

すぐにかけてくれた。頭がはっきりしている分、パニックになっているのが自分でもわかる。僕はそのままダメになるのではという思いに囚われる。

すぐに倉岡さんがザックから酸素ボンベを取り出してセットしてくれた。ゆっくり吸って吐く、少しずつ手足の感覚が戻る。極度の酸欠状態になったようだが、あまりにも突然におこり、その状態が続いたため訳が分からず、パニックになったのだ。そのとき、アコンカグアの山頂に立つことよりも自分の命が大切に思え、家族の顔が目に浮かぶ。

倉岡さんが「大丈夫、あと少しで頂上だ」といって励ますが、僕の気持ちは一度萎えてしまった。

しかし、父が断念したのに、今ここで僕が続いて倒れてしまったらどうにもならないだろう、という気持ちで、気持ちを奮い立たせ、恐る恐る足を山頂へ向かって進める。酸欠の身体に酸素が吸引されると今度は逆に元気になる。毎分2リットルの酸素を吸ったとたんに足が動くようになり、スピー

ドもあがる。ただ次なる不安がよぎる — 酸素の残量だ。僕たちの前に軍隊がいてそのペースがあまりにもゆっくりで、なかなか上に登らせてくれない。残量(時間)を考えると追い越して少しでも早く行きたいと思うが、それを倉岡さんに止められる。それから30分ほど登り、山頂についた！

しかし、直前に酸素を使用したということで素直に喜べない自分がいた。確かに素晴らしい絶景だが、自分自身の過信とオーバーペースによって倒れてしまったことが恥ずかしく、すっかり父の思いやここまで支えてくれた人たちへの感謝の気持ちを忘れそうになってしまった。

それでも倉岡さん、平出くん、ケンロウくん、ジャーニー、エミリアーノ、ハビエール、カチャが、チームメイトのみんなは僕が登れたことに本当に喜んでいる。恥ずかしがっている方がよっぽど恥ずかしい。

そして33年前、当時53歳の父がここまで二日間でベースから登ったという話を思い出した。今回、父と一緒に登れなかったが、こんなにも厳しい山を今の僕以上のペースで登ったという事実で改めてその強さと大きさを感じた。

本来なら父と一緒に登り共に立てると思った山頂であるが、この辛さを感じることによって、尚更にその存在を身近に感じ、一緒に登ったのだという気持ちが芽生える。

ひととおり撮影を終える。直下で倒れたあとに、山頂まで酸素を吸ったせいか身体の調子は戻ってきた。

しかし歩こうとするとまだふらつく。下山も酸素を吸わせてもらい後ろからジャーニーにロープで支えてもらうという情けない形となった。

インディペンデシアまで到着、酸素を吸ったせいか少し体が楽になった気がする。せめてスキーをここからしようと思い、滑走可能な斜面を再度登り始めるが思うように足がでない。どうやら根本的に体力の限界のようだ。この調子でスキーを滑ると怪我をすと思い、本当に申し訳ないがスキーをまた下までガイドに降ろしてもらうことにする。

どうかこうにか体を引きずってニドまで下山したが芯から身体は疲れ切っている。

倉岡さん、平出くん、ケンロウくんも同じようで、倉岡さんは酸素を吸いながら外で大の字に寝ている。

6000^mの滞在から急な父の下山、その数時間後のアタック、あまりにも全てが一気に、一つひとつちゃんと消化できずにここまできた。最後は自分の至らなさに情けない思いであった。

夕食のとき、そんな話をみんなにした

すると倉岡さんは、「やっぱりペースが早いと思ったよ、だいたいそういうのはあの辺りで倒れるのだよね」といった。

僕は「だったら早くいってくださいよ！」といったら倉岡さんが

「でもあそこでペースをゆっくりしなさいといったら、何も学ばないじゃないか、あそこで倒れてもそれでも生きて山頂に立って帰ったからこそ学びが大きかったんだ」といわれ妙に納得した。

恥ずかしかったけど、情けなかったけど、確かに自分の過信や過ちから学ぶにはあそこで倒れる思いをしなければ次に続かないと思う。



山頂へ向けて



TEAM MIURA アコンカグア 登頂！

1 月 22 日

翌日、酸素を吸引して一晩寝ると思いのほか体が軽い。

この下には雪があるという。やっとスキーを履くことができる！

荷物をまとめると目の前の雪の上でスキーを履く

斜面は酷い凹凸であった、ちっちゃいペニテンテス(氷の突起)が無数にあり、ガタガタでとてもじゃないけどエレガントな滑りはできなかつた。それでもスキーを履くとまた世界が違うように見えた。雪があるところは全部滑るところができる。周りが一変して、これまで挑戦や過酷さといった山の

キーワードから軽やかに遊びへと気持ちが大きく変わる。

僕にとって山はやっぱりスキーなんだなと思った。きっと父にとっても。

ニドのキャンプから標高差500mほど滑ることができた。下部は正直怪我をするのではないかと
思うほどペニテンテス(突起)が大きくなった、酸素も薄く喘ぎながらのスキーだったがこの数日、
思い悩んでいた事柄が、スキーで滑り降りることで全てが払しょくされ清々しい気持ちになった。そ
んな気持ちで改めてアコンカグアを見上げる。地元という言葉で「岩の監視人」という名前。

僕はこの岩の監視人に試練を与えられ、恥ずかしい思いも、辛かった思いも見られていた。しかし、
それ以上にこの山から数知れないほどのものを教えられた。山頂でちゃんと思えることのできな
かった深い感謝の想いがプラサ・デ・ムーラのキャンプ地に着く頃に湧き出てきた。岩の監視人はそ
れら全て見ているようだ。

結果、お父さんはドクターストップで下山したが、誰も怪我することなく僕はアコンカグアの山頂に
立つことができ、そして最後はスキーまでさせてもらった。

一緒に登った仲間とアコンカグアに本当に感謝したい。

そして応援して下さったみなさまありがとうございます。 三浦豪太



